

# 遠藤新との比較からみた F.L. ライトのトリムラインを用いた室内意匠の修辞

The Rhetoric of Interior Design through Trim Lines in Houses by Frank Lloyd Wright Compared with Those by Arata Endo

奥山研究室 22M50749 岡本 侑子 (OKAMOTO, Yuko)

**1. 序** フランク・ロイド・ライトの住宅作品の内壁および天井面に用いられている木製のライン(以下、トリムライン<sup>1)</sup>)が、室の分節と連続において重要な要素であることを、筆者は先行研究<sup>2)</sup>において明らかにした。ライトの愛弟子であり大きな影響を受けた遠藤新の住宅においてもトリムラインが用いられているが、トリムラインおよび室の形状に関してライトのものとは異なる表現がみられ、それらとの比較からライトによる室内空間の分節・統合に関する意匠的修辞の独自性を見出すことができると思われる。そこで本研究では、先行研究の成果を踏まえ、ライトのプレーリー・ハウス 21 件 29 室および遠藤の住宅作品 4 件 11 室を対象に<sup>3)</sup> (表 1)、写真や図面を用いて、内壁および天井面におけるトリムラインと室の形状による室内空間の分節と統合を検討することで、遠藤との比較からみたライトの室内意匠の修辞の一端を明らかにすることを目的とする。

**2. 室の形状にみる特徴** 室の内壁および天井面のトリムラインの構成を検討するために、まずは室の形状について整理する。室のボリュームを主空間および副空間の組合せによって捉え、さらに、図 2 左部のように主空間を平・断面形状を**矩形**、**凹凸有り**、**非矩形**に分類し、また、副空間の主空間に対する配置を、主空間外に隣接する**付加型**、主空間内に内包される**内在型**、主空間と空間や天井面・壁面を一部共有する**交錯型**に大別した。主空間の断面形状に関しては、非矩形の室が遠藤では全くみられなかったのに対し、ライトでは約 4 割 (11/29) みられた。また、主空間の平面形状と副空間の配置の組合せをみると (図 2 右部)、遠藤では主空間のみかつ矩形の室が最も多く約 4 割 (4/11) みられた一方、ライトでは約 2 割 (5/29) と少ない。

## 3. 展開図を用いたトリムラインのパタン

### 3.1 トリムラインの分類

全 40 室資料に対して写真資料と平面図を用いて、トリムラインの位置と、天井面・壁面で開口部や家具が配置されてトリムラインが現れ得ない部分の位置を示した展開図を作成し、分析する。はじめに、トリムラインの

表 1. 対象作品リスト

住宅番号	竣工年	住宅名	対象室名
W1	1900	B. Harley Bradley House	L: W1-1, D: W1-2
W2	1901	Frank Henderson House	L: W2-1, D: W2-2
W3	1901	Ward W. Willits House	D: W3
W4	1902	Susan Lawrence Dana House	B: W4-1, D: W4-2, G: W4-3
W5	1902	Arthur Heurtley House	D: W5-1, L: W5-2
W6	1903	George Barton House	D/L/Lb: W6
W7	1904	Burton J. Westcott House	D/L/R: W7
W8	1904	Darwin D. Martin House	D/L/Lb: W8-1, R: W8-2
W9	1904	F.F. Tomek House	L: W9
W10	1905	Thomas P.Hardy House	L: W10
W11	1905	W.A. Glasner House	L: W11
W12	1906	Frederick C. Robie House	L/D: W12
W13	1906	K. C. DeRhodes House	L/D: W13
W14	1906	George Madison Millard House	L: W14
W15	1907	Avery Coonley House	L: W15-1, D: W15-2
W16	1907	Stephen M.B. Hunt House	L: W16
W17	1908	E.E. Boynton House	D: W17
W18	1908	Meyer May House	L: W18-1, D: W18-2
W19	1909	Frank J. Baker House	L: W19
W20	1909	Kibben Ingalls House	L: W20
W21	1912	Francis W. Little House	L: W21
E1	1924	萩原唐吉邸	L: E1-1, Lb: E1-2, B: E1-3
E2	1925	近藤賢二別邸	L/D: E2-1, T1: E2-2, T2: E2-3
E3	1927	加地利夫別邸	L: E3-1, B: E3-2, D: E3-3
E4	1931	小堀完治邸	L: E4-1, T: E4-2

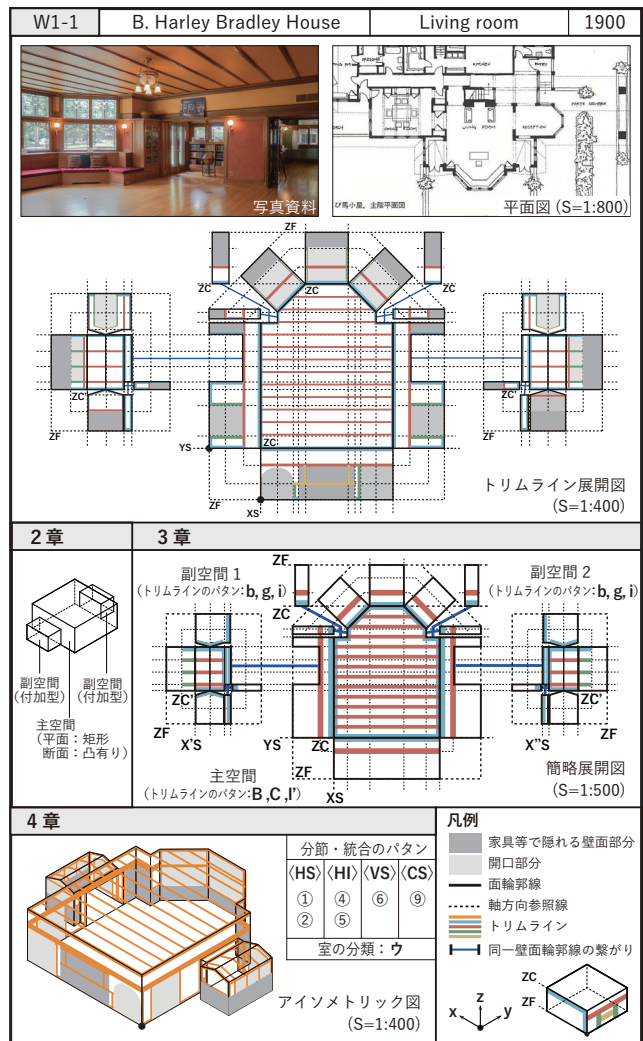


図 1. 分析例



複数の分節・統合のパターンを表現しうる。次に、分節・統合の対象および水平・垂直方向を横軸に、分節と統合の性質を縦軸にとり、水平・垂直方向にそれぞれボリュームを分節・統合する〈HS〉、〈HI〉、〈VS〉、〈VI〉と、天井面・壁面とボリュームをそれぞれ分節・統合する〈CS〉、〈CI〉、〈WS〉の7つに分類した(図5)。これにより、〈HI〉のボリュームの水平方向を強調する〈HI〉、〈VS〉と、垂直方向を強調する〈VI〉、〈HS〉という対照的なまとまりを得た。

#### 4.2 トリムラインを用いた室内意匠の比較

これまで検討した室の形状と室ごとのトリムラインのパターンの組合せをまとめ、さらに分節・統合のパターンの組合せから、トリムラインを用いた室内意匠のパターンア～ケを位置づけた(図6)。アは〈HS〉、〈HI〉、〈VS〉、〈VI〉の全てを持つ。イ～エは〈HS〉、〈HI〉、〈VS〉に該当し、それぞれ〈CI〉、〈CS〉の有無によって分類した。オ、カは〈HI〉、〈VS〉に該当し、それぞれ〈CI〉、〈CS〉を持つ。キは〈HS〉、〈VS〉を、クは〈HS〉のみを、ケは〈HS〉、〈HI〉、〈VS〉、〈VI〉のいずれも持たないものに分類した。その結果、〈HS〉、〈HI〉、〈VS〉を併せ持つア～エはライトの作品のみ、オ、カはライトと遠藤の作品の混合、キ～ケは遠藤の作品のみによって構成され、両者に明確な差異を見出せた。また一般的な傾向として、主空間のみで構成されたものの多くが〈HS〉を持たないオまたはカに属することから、一体性のあるボリュームの平面形状を維持するようなトリムラインの表現といえる。また、断面形状が非矩形の室の多くがウに集中し、その全てが〈CS〉に該当することから、勾配天井面はボリュームから分節される傾向が高いことがわかる。一方、断面形状が矩形のものが多いイやオは〈CI〉に該当することから、水平天井面はボリュームと統合される傾向がみられた。

次に、室内空間における水平方向・垂直方向を強調するそれぞれ〈HI〉、〈VS〉と〈VI〉、〈HS〉の有無と、天井面の強調性に影響を与える〈CI〉、〈CS〉の有無によって軸を設定し、全ての室内意匠パターンを相互に比較したものが図7である。ライトの全ての作品では〈HI〉、〈VS〉がみられ、トリムラインによる水平方向の強調がみられる。特にア～エは水平・垂直方向いずれの特徴も併せ持つものであり、トリムラインによる室の分節と統合が複雑なパターンであるといえる。

一方、遠藤の作品は水平・垂直方向いずれの印象も顕

著ではないことがわかった。特に遠藤の7割以上が属する分類キ～ケは〈HI〉、〈VS〉の特徴がみられず、さらに〈CI〉、〈CS〉の特徴もみられなかった。また、ライトと遠藤のいずれにおいても〈VI〉かつ〈HS〉が有り、〈HI〉と〈VS〉の少なくともいずれかの無い室はみられず、垂直方向性のみが強い室はみられなかった。

これらのことより、遠藤とライトの室におけるトリムラインの特徴を比較し考察する。まず、遠藤のトリムラインは、前章で確認したように天井面・壁面を越境せず、トリムラインの端部が他のトリムラインと繋がりを持たない事例が多くみられることから、同一の軸方向参照線上で一周せず、分節・統合のパターンをなさないことが多い。これは、遠藤の作品に多くみられるように和と洋を融合させた意匠表現のひとつとして、室の壁面に日本の伝統的な家屋に一般的でない不規則な開口部や家具の配置がみられ、それらに沿うようにトリムラインが配されていることを示しているといえる。

一方、ライトの室にみられるトリムラインは、A、B、Cが多いことからわかるように、途切れることなく同一の軸方向参照線上で連続することが大半であり、さらにそれらが造作家具や開口部の縁に沿っていることから、ライトの室内意匠はトリムラインの配置と開口部や家具の配置が密接に関わり合い構成されていると考えられる。また、トリムラインによる室の分節や統合は、室の置き家具の位置や室の複数の使い方と密接に関係していることが写真資料から読み取れ、トリムラインによる修辭的表現が室内意匠に影響を与えていることが推察される。

**5. 結** 本研究では、ライトと遠藤の住宅作品の室において、天井面・壁面のトリムラインの構成を示した展開図やアイソメトリック図を作成した。遠藤とライトではトリムラインの配置の傾向に差異が認められ、遠藤においては開口部や家具配置の不規則性を、ライトにおいては要素や空間を跨ぎながら水平性を強調するといったような、トリムラインを用いた室の分節・統合に関する修辭的表現の特徴を明らかにした。

註

1) トリムラインとは、参考文献1)に記述されるようにライトが"Trim"と称したとされる室内壁面および天井面に現れる木製のラインのことである。本稿では建具に用いられるものは含めず、壁面から備付け家具に明らかに連続しているものは含める。

2) 岡本侑子、那須聖：フランク・ロイド・ライトのプレーリー・ハウスにおけるトリムラインからみた室の分節と連続、日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)、pp747-748, 2022.07

3) ライトのプレーリー・ハウスおよび遠藤新の住宅作品の室内の写真資料から室内全ての壁面の全貌と大まかな空間形状が把握できる室を研究対象とした。参考文献i)～v)の書籍およびweb文献によりライトの住宅作品を24室、現地調査により撮影した写真からライトの住宅作品5室、遠藤の住宅作品11室を対象作品に選定した。

参考文献

i) H. Allen Brooks: Frank Lloyd Wright and the Destruction of the Box, Journal of the Society of Architectural Historians, Vol.38, No.1, Mar., 1979, pp.7-14

ii) William Allin Storrer 著、岸田省吾監訳：『フランク・ロイド・ライト全作品』、丸善、2000

iii) Alan Weintraub(写真)、Alan Hess(著)、Kathryn Smith(寄稿)：Frank Lloyd Wright Prairie Houses, Rizzoli New York, 2006

iv) ブルース・ブルックス・ファイファー著、二川幸夫訳：GA TRAVELER 004 プレーリーハウス Frank Lloyd Wright Prairie House, ADA, 2002.09

v) Carla Lind: The Wright Style, Simon & Schuster, 1992

